

弟を喪むらじとつしないて

古市 史

君の死を報らせる電話板橋の警察より来て切りてしまいぬ

ポケットのスマホも二トロも間に合わずひよいと攫さらわれ行きし君はも

宛名書き済ませし葉書卓に在り君の逝去を吾あが書き継ぎぬ

ギャラリーの真中まなかにはほえむ君のフォト頬に手を伸べ師は目を閉じき

「おい、来たよ」墓石を撫で缶ビール置く男らを風花が捲まく

吾を追う小さき君を疎うとみたる記憶の悲し取り残されて

「月夜」とうインクで君の名を綴る万年筆に遺のこる書き癖

喜びも永訣わかれの傷みも記念日となりて暦は家族の歴史